

科学研究費基盤研究(C)

「19世紀前半のアメリカ合衆国における太平洋像と
そこに映し出された合衆国理解の研究」

研究代表者：遠藤泰生

プロジェクト最終年度となった本年、太平洋以外の海域における海の歴史を内外の研究者に学びながら、2018年9月にはワシントン・ニューヨークで今後の研究につながる史料調査を行った。

まず前年度に引き続き、関西学院大学が展開する「海民」の研究会に合流し、海洋の歴史全般への知見を深めたことを記しておく。とくに2018年7月8日に行われた鈴木英明（長崎大学）とケヴィン・ル・ドゥディック（Kevin Le Doudic、南ブルターニュ大学）を報告者としたシンポジウムでは、大西洋と太平洋の歴史に挟まれ光が当たりにくいインド洋の歴史を学ぶことが出来た。インド亜大陸とアフリカ大陸に挟まれ太平洋へと繋がるこの海洋には、欧米列強が進出を始めるずっと以前からインドの「海民」や中近東マスカットからの「海民」の流れが存在した。その流れの中でザンジバルが交易のハブとして栄えることになる。鈴木氏の報告はその歴史を「海民」の末裔への聞き込みと史料解説から浮き彫りにする、非常に興味深いものであった。インド西部グジャラ地方に出自を持つ「海民」カチ・バティヤ（Kachichhi Bhatiyas）がその物語の主役で、交易物資の多様性を資源にアメリカを含めた欧米資本との信用取引を展開し、島嶼地域を含んだインド洋西部海域にひろがる交易網を彼らは造り上げたという。カチ自身、グジャラ地方に由来する民族的規範を遵守しつつ、モノの流通に利する取引規則を臨機応変に創出し、環インド洋世界における有数の交易都市へとザンジバルを育て上げたのである。その歴史は、海の歴史の重層的な構築の過程を明らかにする刺激的な逸話に満ちていた。2005年1月にザンジバルの東海岸に立ち、インド洋、ブルボン諸島（現在のモーリシャス諸島）の方角を見晴らした経験を著者は持つ。その時の海の青の記憶と鈴木氏が重なり、印象に残る報告となった。

一方、東インド洋のフランス交易の拠点となった港湾都市ボンディシェリの、18世紀来の歴史を、ル・ドゥディック氏が掘り下げた。欧米のメトロポールを起点に波状的に拡大するイメージで、植民地貿易の歴史をフランス帝国史の多くは記述してきた。これに対し、植民地の独自性と自律性を重視する脱中核分析（off-center analysis）の手法で、ル・ドゥディック氏はボンディシェリの歴史を跡づける。具体的には、「人種」による居住空間の分節と分断（例えばwhite townとblack townの区分け）、広東・日本にまで伸びた交易の積荷の詳細など、ボンディシェリ固有の社会経済状況や地理条件に根ざす歴史の細部が明らかにされ、これも刺激的な報告になった。帝国の版図を拡大する動きとエキゾチズムを国内で商品化する動きが、近代フランスでは並行して進んだ。その動きを促進したインド洋貿易の前衛として、ボンディシェリは拡大を遂げたという。しかしその一方で、19世紀転換期を挟む約50年の間に、水夫・貿易商・軍人・行政官などを含む4万人ほどの植民地人が短期的にこの街に滞在したともいう。まさしく「海の回廊」としてボンディ

シェリは帝国の経済活動を支えたのである。それらの人々が現地の人々と切り結んだ人的関係もその港街の歴史を深化させており、今後、そうした側面から「海民」の活動を掘り下げることも出来るとル・ドゥディックは語った。海港都市での人の邂逅をその動機に着目して *inevitable, mercantile, voluntary* の三種類に分類する一方、その過程で生まれる文化の往還を、一方的な消費の関係 (*unilateral consumption*) と双方向的創造の関係 (*bilateral consumption*) に分類するなど、海の歴史を分析するフランス史学界の分節的な視点をル・ドゥディックから学ぶことも出来た。

このように内外の研究者と知見の交換を進める一方、2018年9月9日から20日までは、合衆国のワシントンとニューヨークで史料調査を行った。大型ハリケーンの南部襲来とあいにく重なったため、ワシントンでの活動は少し制限されることとなった。それでも、国立公文書館 (NARA) と議会図書館 (LC) では、史料調査に十分な時間を使うことが出来た。なかでも、1842年からアメリカ海軍天文台長を務め、英国仏露の各国天文台と海洋情報を交換し、1853年にはベルギーのブラッセルで海洋気象学の国際大会を主催した、マシュー・フォンテイン・モーリ (Matthew Fontaine Maury) に関連する史料の収集に成果を上げることが出来た。加えて、ワシントンのポトマック河に面する海軍工廠 (the Navy Yard) にある海軍博物館を訪れることも出来た。上述のモーリは、南北戦争時における南軍将校としての経歴が災いし、戦後不遇をかこったが、合衆国における海洋学 (Oceanology) の発展に記した軌跡は大きく、海軍工廠の博物館でも「偉人」の扱いであった。彼独自の展示ブースが一つ用意されている。しばらくは彼についての研究を続けたいと考えている。セントラルパークの西側に位置するニューヨーク歴史協会でも幾つかモーリに関する史料調査を行った。モーリの研究は科学史との交差を必須とする。その場合、「アメリカの科学」と総称し得るようなナショナルなサイエンスの歴史の一端として海洋学の歴史が描けるのか、あるいは描くのが妥当か、海の歴史に国籍は必要かといった問いが浮上する可能性がある。経済利益を追求するための遠洋航路の探索と純粋科学の見地からの海洋調査の要請に、19世紀半ばの海軍天文台は同時に応えねばならなかった。ナショナル・ヒストリーの枠内と枠外に同時にひろがるその活動を、今後より複眼的な視点から分析してみたい。

なお、今年度の調査を踏まえた報告を、12月15日に明治大学で、12月29日に関西学院大学でそれぞれ行う機会を得た。その成果を出来るだけ早期に公刊したい。本プロジェクトによる3年間の研究活動を通し、「海のアメリカ史」を切り拓く道がしだいに開けてきたと実感している。引き続きその道を切り拓くことに努力したい。